

地域分権の推進に関する条例

26 年 10 月 1 日施行

市民や地域団体などの役割、市の責務を明文化

各主体の役割（努力規定）	市民	自治会活動などの地域活動に参加する
	自治会	より良い地域づくりのために地域活動に取り組む▷地域住民に自治会への加入、地域活動への参加などを呼び掛ける
	マンション居住者管理組合	自治会の形成や、地域の自治会活動などに参加する▷コミュニティ組織の構成団体として参画するなど地域づくりに取り組む
	コミュニティ組織	課題の解決に向けて、より良い地域づくりに取り組む▷地域住民に自治会活動などへの参加を呼び掛け、自治会活動の活性化に取り組む
	住宅業者	住宅を販売するときなど、自治会加入などについて入居者に説明する
市の責務		自治会加入促進や自治会・コミュニティ組織の活性化・組織化を支援

コミュニティ組織の位置づけを明確化

コミュニティの区域や構成員、事業内容について規定。区域は小学校区、構成員は地域住民、実施する事業は地域課題を解決し、住みよいまちづくりを進めるもの。

地域づくり一括交付金（従来の補助金の一部を整理統合）

コミュニティ組織を対象に、区域の主要な団体が組織の運営に参画していることと住民などの構成員で組織されていること、運営必要事項が規約に定められていること、地域別計画を策定していることを要件に交付。

11月27日に開催

桜小コミュニティ 推進協議会設立総会

全地区にコミュニティ組織

「地域分権の推進に関する条例」の施行で、コミュニティ組織の役割などが明文化されました。

それに伴い、桜が丘小学校区ではコミュニティ組織の設立に向けての気運が高まり、検討が進められています。市内全地区でコミュニティ組織が設立されることになります。

設立総会を開催

11 月 27 日(金)午後 7 時から、総合センターで、桜が丘小学校区のコミュニティ組織を設立しようと総会が開催されます。

地域ごとに違う オリジナルの地域活動

市域が南北に長く、タツノオトシゴのような形をしている川西市。南部には特産の桃やいちじく畑が広がり、電鉄各社が乗り入れる川西能勢口駅周辺は都市化が進んでいます。また、大都市へのアクセスが良いことから、中北部には大規模団地などの住宅が立ち並び、そのすぐ北側、一庫ダムの知明湖周辺には、キャンプ場や日本一の里山といわれている豊かな自然も隣在しています。

このように特色の異なるそれぞれの地域によって、必要とされる地域活動も違って当然です。そこに住む人たちが、自分たちで考えたオリジナルの地域活動。それを実現するための取り組みが各地域で始まっています。

活動の中心は コミュニティ組織

市内には、地域のことをずっと支えてきた自治会や地域活動団体があり、それらの連携を図るためにコミュニティ組織があります。主に小学校区ごとに組織されたコミュニティでは、まちづくりのためにさまざまな取り組みが進められてきました。

しかし、近年は、高齢化に伴う担い手不足、価値観や生活スタイルの多様化などから、自治会に加入しない世帯が増加する傾向にあります。どうすれば地域活動が活性化するのでしょいか。

市ではその仕組み作りに努めてきました。市民と行政が一緒に、なって策定した地域の未来予想図である「地域別構想」。コミュニティごとに地域の資源や課題、ありたい姿などを抽出したものです。その実現に向けた具体的な取り組み内容は「地域別計画」に記されています。地域が、それぞれの特性に応じた活動をするための羅針盤です。

また、昨年10月には「地域分権の推進に関する条例（上記）」を制定。この中には、地域に関わる各主体の役割やコミュニティ組織を対象とした「地域づくり一括交付金」の交付についてなどが明記されています。

そして、いよいよ今年度から本格的に地域分権制度がスタートしました。各地域で一括交付金を活用した新たな取り組みが始まっています。

オリジナルの地域活動。各地域特有の資源を生かし、先進的に事業を進める2つのコミュニティ活動を紹介します。

地域の特徴を魅力へ
自分が住む地域の特徴を、すぐに挙げられますか。同じ市域でも、歴史的な経過や地理的要因などから、その特徴はさまざま。でも、その違いこそが地域の魅力です。それぞれの地域を愛する住民が地域課題などを出し合い、自ら策定した「地域別計画」。まさに今、実現に向けた取り組みが始まっています。

地域別計画とは
住民が自らの発意で“地域のありたい姿”を掲げた「地域別構想」。これを実現するために、地域が行う事業を取りまとめたものが「地域別計画」です。新たに創設された「地域づくり一括交付金（3ページ上）」はこの地域別計画を実現するために使われます。

11月29日に同時開催

東谷地区収穫祭×秋の植木まつり

11月29日 日 午前9時—午後3時 (小雨決行)

@見んな野ふれあい会館南側広場

駐車場には限りがありますので注意してください

東谷地区収穫祭

内容 地元産の新鮮な野菜や川西産の新米などの販売

ふるまい餅

ダッチオープンセミナー

試食会など

主催 東谷小学校区コミュニティ推進協議会、

東谷地区生産組合、JA 兵庫六甲ほか

秋の植木まつり

内容 特産の植木のほか花苗の販売

炊き込みご飯など加工品の販売

肥料の無料配布 (植木購入者を対象)

主催 市、市農業振興研究会、市営農研究会

問合せ 産業振興課 Tel (740) 1164



まれてきたものですから、収穫祭の開催には農業関係団体の協力が不可欠。住民の皆さんと一緒に収穫を祝うイベントにしたいと思っています」

**地域の課題と良さを共有
新たな交流を広げる機会に**

市最北部に広がる豊かな自然と農村風景、農作物は東谷らしさの一つ。これらを活用した「収穫祭(上記)」を地域住民の新たな交流の場として企画。「地域づくり一括交付金」の対象事業として計画したそうです。

「40年前、笹部のこの辺りに家は70戸程でしたが、今では700戸を超えてきました。ずいぶん市街化が進んできたと感じます」

田畑が宅地へと変わっていく様子をずっと見てきたという前西さん。変化を感じながらも、地域に子どもたちが増えたことで、運動会など地域の催しが以前にも増してにぎわっていると話します。

「私たちより若い世代は、農業を継いでくれないのではと思います。特に米は採算が取れないです。から。さみしい限りです。担い手の高齢化が進んでいるので、このままではどんどん厳しくなるでしょう。でも、ここにはまだ多くの農地があり、貴重な農村風景が

残っています。できるだけこの風景を残したい。少しでもこの地域の良さを知ってもらい、地産地消が進むきっかけにしたいです」

前西さんは、自分ができる範囲でさまざまな種類の野菜を作り、自宅のガレージで販売しているそうです。

「いつも午前中には売り切れるんですよ。買ってくれる人と時々話をしますが、近所のおじいさんが何度もトマトを買いに来てくれて、『孫はこのトマト以外、食べないから』って言うんです。それを聞くと、来年も、もっとおいしいトマトを作ってあげようって思いますね」と笑顔。

「収穫祭の時期にちょうど取れるのが白菜ですが、これも甘みが違います。私は一株ずつ肥料をやり、手で土を寄せて、自分の子どもみたいに手をかけて育てています。もちろん、周辺の農家の方も手間をかけ、大切に作り続けています。皆さんにも、ぜひ一度味わってもらいたい。今年の収穫祭は、来年度からの本格的な事業化に向けたプレイベントですが、地域のことや地元産の農作物、その作り手を知る機会にもなると思います。そこから、住民同士の理解が深まり、新たな交流が広がっていくでしょう」と話します。

東谷地区収穫祭実行委員長

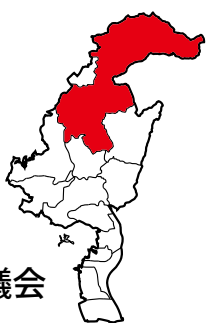
前西久之さん(69歳)



15年ぶりに収穫祭を復活 新旧住民の新たな交流の場に

豊かな自然と農村風景の広がる東谷らしさを活用
地産地消が進むきっかけに

東谷小学校区コミュニティ推進協議会



地域のありたい姿
実現への第一歩

「地域別構想」に掲げられた地域課題やありたい姿。東谷小学校区の地域は、その中の「自然と農で東谷ブランドをつくる」「東谷の自然の良さを地域の人が理解する」という取り組み項目に着目し、実現に向けて大きく動き出そうとしています。

「ずっと思っていたことが形になってきました」

東谷地区収穫祭実行委員長の前西さんが、開催への思いを話してくれました。

「昨年、コミュニティの文化祭の時に『10年以上開催していなかった東谷地区での収穫祭を復活させたい』と、JAの支店長へ打ち明けたんです。そうしたら、JAも合併して15年になるから『ぜひやりましょう』ということになって。うれしかったです」

これをきっかけに、昨年度、コミュニティの地域分権を導入する準備委員会が協議し、農業関係団体との意見交換会がもたれました。そして、今年7月、地域と農業関係団体が情報交換や連携するための東谷農業振興協議会が立ち上がったのです。

「農業は、この地域です」と営



民生委員・児童委員(主任児童委員)
清和台南小学校「けんけんぱ」担当

武田由美子さん(51歳)

分の商品券がもらえる有償ボランティアです。商品券は地域の商店などで使えます。

「今年4月に子どもたちを募集した時も、PTAを通じて全児童にお知らせしました。皆さんの協力で、6月から事業を開始。けがをした時の保険対応などもあり、参加は登録制にしています」

スタート時に清和台小学校で約70人、清和台南小学校で約60人だった登録者数が、わずか3カ月で2校合わせて180人に増加しました。

しかし、見守りスタッフや一緒に遊ぶボランティアはまだ不足していて、スタッフの登録者を増やしていきたいと話す村上さん。

事業を進める中で難しかった点

「私、この地区は恵まれてるっ
て思います」そう話すのは、清和台南小学校区の民生委員・児童委員で「けんけんぱ」担当の武田由美子さん。村上さんと共にこの事業を進める、もう一人の中心人物です。

「この地区には2つの小学校が

**関係団体の協力が成功の鍵
共通の目的で地域と連携**

を聞くと「すでに行われている事業とのすみ分けが難しかったですね。でも、学童保育に入れない子や兄弟で下校したいけど、終わる時間が違う子もいて、そういう子たちが自由に選択できる居場所をつくりたいって頑張りました」

授業が終わると「三角おむすび」の教室に飛び込んでくる子どもたち。まずは宿題に取り組み、その後は異学年が入り混じって、教室で折り紙や工作などをしたり、運動場で元気に走り回ったりして遊びます。

「この役割、私は楽しんでやっています。地区での子どもたちの様子と、ここでの様子は別人のようについて、地区ではおとなしい子もここではみんないきいきと話し掛けてくるんですよ。子どもたちの成長を近くで見守れるのがうれしいんです」

あるので、同じように居場所づくり事業を進めたいって、それぞれの小学校に相談しました。どちらも快く協力してもらえたんです。すぐ貴重なことだと思います」

村上さんと武田さんは、お互いの学校であった課題や問題を話し合い、コミュニティの会長に相談したり、学校とも情報を共有しながら進めているそうです。

「本当に感謝しています。皆さん、それぞれ立場や関わり方は違っても、一番は子どもたちのことを思っていてくれるんです。共通の目的を持って、地域と学校が協力し合えるっていいですよね。ボランティアの皆さんも同じです。私たちの事業には、子どもたちを見守るおとなが欠かせません。2つの地域で同様にできるよう、PTAや地域分権委員会、老人会の協力で声掛けをしてもらったら、年齢に関係なく子どもたちのためにできることをしようって集まってくれました。自然にここが3世代の交流拠点になってきていると思います」

子どもたちとの会話や地域の人のつながりになると話す武田さん。学校に来ることが、高齢者にとっても生きがいになっていけばと将来を見据えていました。

事業は交流のきっかけ。地域の特徴を魅力へ

Actions for a Change

今回、紹介した新たな地域の取り組みは、どちらも今ある地域の特徴を生かし、魅力に変えたものです。

今までは、各地域に対して使道の決まった補助金が交付されていました。しかし、それでは地域にとって、重点的に行いたい事業や特色ある事業の実施が難しいという問題がありました。

そこに住む人たちがその地域の実情に合わせて使い道を決め、主体的に事業を進めることができるのが「地域づくり一括交付金」です。

東谷地区や清和台地区で始まった地域活性化のための事業。中心的存在として熱心に活動を続ける3人が、声をそろえて言うことがあります。

それは、事業を通して、顔見知りになった子どもやおとな、関係団体が声を掛けあい、地域がつながっていくように、この事業を役立てたいということ。

そこに住む人にしか分からない地域の魅力を、あなたの周りでも輝かせてみませんか。



民生委員・児童委員(主任児童委員)
清和台小学校「三角おむすび」担当

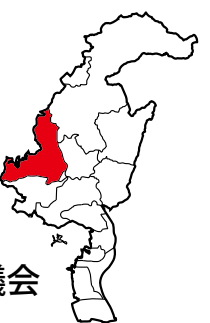
村上智永子さん(53歳)



「あったらいいな」を実現 三世代交流居場所づくり

学校の放課後に子どもたちを見守る
スタッフ登録者を増やすことが課題

清和台地区コミュニティ推進協議会



地域に足りないものって
何だろうが始まり

「昨年、地域分権委員会がコミュニティに立ち上がった時、私たちの地区でどんな事業をやるのか話し合いました」と話すのは、清和台小学校区で民生委員・児童委員をしている村上智永子さん。三角おむすび「けんけんぱ」と名付けた三世代交流居場所づくり事業を進める中心人物の一人です。

「私は主任児童委員でもあるので、子どもたちのことを思い、地域に足りないものって何だろうと考えたんです。そうしたら、学童保育に入れない子のお母さんや、『子どもが放課後どこにいるか、何をしているか分からへん』って言うお母さんの『あったらいいな』を思い出して、放課後に子どもが自由に遊べる居場所をつくらうってことに。発想したら、次は場所。やっぱり、子どもにとって学校ほど安全で安心して遊べる場所はないよねって、空き教室を貸してもらえようコミュニティから校長先生にお願いしました。そして人。子どもの見守りボランティアには、PTAや地域の方々協力してくれることになったんです」

この見守りは、事業の安全と継続性を考え、1回につき500円